NIDS 防衛研究所
The National Institute for Defense Studies

北朝鮮との「伝統的友誼」への回帰を選択した中国

地域研究部アジア・アフリカ研究室　　主任研究官　　山口　信治

NIDSコメンタリー　第 72 号 2018 年 5 月 23 日

2018 年 3 月 25 日-28 日、北朝鮮の金正恩労働党委員長は、極秘裏に中国を訪問し、習近平総書記と首脳会談を行った。さらに 4 月 27 日の南北首脳会談の後、5 月 13 日には金委員長が大連を訪問し、再度習総書記との会談を実施した。

朝鮮半島情勢が大きく変化する中で、中国がどのような政策をとるのだろうか？この点は、朝鮮半島情勢だけでなく、東アジアにおける国際関係の今後を占う上で重要である。特に理解が難しいのが、中国と北朝鮮の関係である。中国と北朝鮮は、少なくとも名目上は同盟国であり、朝鮮戦争でともに戦って以来、「血で固められた友誼」があるとされてきた。しかし他方で、実際の中朝関係は、一枚岩と言い難いだけでなく、近年では対立を示す兆候が数多く見られている。本稿では、これまでの中朝関係の動向の文脈から、金委員長訪中以降の中国の北朝鮮政策の方向性を分析する。

朝鮮半島における中国のジレンマ

中朝関係の正常化をもたらしたのは、米朝首脳会談の発表であった。米朝首脳会談実施の合意に関して、中国はほとんど何の役割も果たさなかったように思われる。オバマ政権や初期のトランプ政権は、北朝鮮問題における中国の役割を期待していた。その期待の前提には、中国が北朝鮮に対して影響力を持っているという想定があった。

しかし、中朝関係は、金正恩時代に入って疎遠なものとなっていた。金正日時代、中朝は非常に密接な政治的な関係を保ってきた。最高指導者による相互訪問は 9 回行われ、それ以外の高レベルの往来も盛んであった。また経済的にも北朝鮮の中国依存が深化する傾向にあった。しかし、金正恩時代に入ると、こうした関係は悪化の一途をたどった。政治的に見ても、最高指導者による訪問は行われず、高レベルの往来も稀であった。特に中国とのパイプを持っていた張成澤氏が処刑されて以降、政治的関係は完全に冷却化していた。経済的には、北朝鮮の中国依存が深まっていたものの、中国は北朝鮮に対する国連の経済制裁を真剣に履行し始め、北朝鮮に対する圧力は増大していた。

中国から見て、朝鮮半島の問題はジレンマに陥っていたと言えるだろう。すなわち、北朝鮮が核・ミサイル開発を継続し、挑発的行動をとることは、地域の不安定化を招く上に、これを理由として米国と韓国の同盟が強化され、特にミサイル防衛協力が深まるため、中国にとって望ましくない。しかし、北朝鮮が崩壊したり、米国の攻撃を受ける事態は、自国の安全保障上の脅威となるため避けたい。中国がこれを避けるためには、各国の妥協を促したものの、北朝鮮に対する影響力は低下し、米国には対北朝鮮制裁強化の圧力をかけられるという状況にあった。

このようなジレンマの中で、中国国内では北朝鮮との関係をめぐって論争があった。すなわち、中国の北朝鮮との関係は、戦略的な財産なのか、戦略的な負債なのかという点をめぐる論争である。戦略的財産と見る議論は、北朝鮮は米韓同盟に対するバッファーゾーンであり、また中朝の特

殊な関係は、米国に対するカードになるとの考え方である。他方、戦略的負債と見る議論は、北朝鮮は中国の利益を顧みることなく行動しており、その行動の結果、米韓同盟が強化され、さらに中国は北朝鮮の行動を押さえられないことについて各国から非難されており、北朝鮮との関係は中国にとって重荷にしかなっていないと考える。こうした論争は金正日時代から存在していたが、金正恩時代に入り、北朝鮮を戦略的負債と見る見方が強くなってきていると見られていた。

「伝統的友誼」への回帰を戦略的に選択

しかし今回の二回の首脳会談が示しているのは、中国が、中朝関係の悪化に歯止めをかけ、かつ北朝鮮を切り捨てずに、戦略的財産と見る立場に戻ってきたということである。

金正恩委員長が最初の外国訪問に中国を選んだことは、重要な意味を持つ。金正恩委員長自身がこのことは「朝中友好の伝統を継承し、朝中友誼を重視する心意を示す」と述べている。3 月の金委員長訪中以降、中朝の「伝統的友誼」への回帰のアピールが盛んになされた。金正恩委員長が、飛行機ではなく列車による移動を選んだのも、金正日総書記のやり方を踏襲することを示す狙いがあったと思われる。

実際の会談においても、両首脳は中朝の「伝統的友誼」を確認し合った。習総書記は、伝統的友誼の継承と発展は「歴史と現実」に基づくものであり「国際・地域構造と中朝関係の大局に基づく、戦略的選択であり、唯一の正確な選択」であると述べて、伝統的な関係への回帰が戦略的選択として正しいことを主張した。会談では、ハイレベルの交流や党と党の交流の重要性が強調され、以前までのような往来の復活が示唆された。さらに、新華社の報道によれば、金委員長は、金日成主席・金正日総書記の「遺訓」に基づいて半島非核化を実現すると述べたという。

このように、「伝統的友誼」や「遺訓」への回帰が強調されており、これが戦略的選択として正当であるとされている。これは何を意味するのだろうか？「伝統的友誼」に明確な定義があるわけではない。中国と北朝鮮の間には、朝鮮戦争でともに戦った「血で固められた友誼」があるとされてきたが、歴史研究が明らかにしているのは、こうした「伝統友誼」は虚構に過ぎなかったことである。

しかし重要なのは、実際にこのような特殊な関係があるか否かではなく、そのような虚構を両国が再び掲げるようになったこと、両国の関係がそこに再び帰ってきたという点であろう。「伝統的友誼」は虚構に過ぎないとしても、緊張を含んだ中朝関係を、両国にとって都合が良いようにまとめ上げるのに必要な政治的虚構なのである。

こうした虚構に回帰してきたということは、様々な葛藤や対立はありつつも、中朝は互いの戦略的価値を認め、関係改善に動き出したということを意味するだろう。そうであるとするならば、中国は、原則論として朝鮮半島の非核化と各国の協調を唱えつつ、北朝鮮の体制存続を暗黙裡に、あるいは明確に支えてようとするだろう。「朝鮮半島の非核化」は、米国の主張する「北朝鮮の非核化」と異なり、北朝鮮の非核化を進めるのに合わせて、韓国の非核化、すなわち米軍の核の傘を弱めるという双方向的なプロセスを示唆する。

こうした傾向は、すでに 5 月 8 日の習近平―トランプ電話会談にあらわれている。金委員長との二回目の会談を終えた習総書記は、トランプ大統領と電話会談を実施した。その中で、習総書記は、北朝鮮問題に関して、米朝が歩調を合わせて相互信頼を作ること、段階的に行動をとること（段階的核放棄という北朝鮮の立場に立つもの）、米国が北朝鮮の合理的な安全保障上の関心に配慮すること、という中国側の希望を表明した。また習総書記が米朝会談に合わせてシンガポール入りするとの説も出てきている。これらが示唆するのは、中国は北朝鮮へのコミットメントを強めつつ、米朝交渉のプロセスに深くかかわり、そこから自国にとって最適な結果が出ることを目指すとい

うことである。

なぜ中国は「伝統的友誼」への回帰を選択したか

それでは、中国はなぜそのような選択をとったのであろうか。しばしば指摘されるのが、「乗り遅れを防ぐ」という点である。すなわち、中国は米朝首脳会談実施の合意に関して、中国はほとんど何の役割も果たさなかったことから、どうにかしてこのプロセスに関与し、自国のコントロール外で事態が進むことを避けたかったというのである。

ただし、中国からみれば今回の朝鮮半島情勢の変化は、乗り遅れの危機というよりは、朝鮮半島における影響力回復のチャンスと映った可能性がある。北朝鮮は、米国の軍事的圧力にさらされる中で、南北関係の融和と米朝首脳会談の開催に向けて動いたが、この中で中国との関係改善を必要としたと考えられる。中国の後ろ盾がない状態では、米国との交渉において不利な立場となるだけでなく、交渉が決裂した場合、攻撃を受ける可能性がある。これを防ぎ、交渉をできるだけ有利に進めるためには、中国との関係改善が不可欠であった。よって中朝関係の改善は、北朝鮮側が積極的に動いたのではないかと考えられる。中国からすれば、中国は北朝鮮との関係を改善することで、これまで著しく低下していた北朝鮮に対する影響力を再び確保し、朝鮮半島問題が自国のコントロールを外れることを防ぐことができるようになるという意味で、チャンスが巡ってきたと言えるのではないだろうか。

またより大きな背景として、米中関係の悪化という傾向が明らかとなっていたことも重要であろう。オバマ政権後期から、米中関係において様々な問題が起き、米中関係はギクシャクし始めていた。トランプ政権が誕生した当初、中国は、トランプ大統領は取引可能な相手ととらえていたものの、2017 年末までに、トランプ政権の対中姿勢はより強硬なものとなっていった。2017 年 12 月に発表された国家安全保障戦略は、中国を「戦略的競争相手」、「現状変更勢力」と位置づけ、かつ従来の政権のとってきた関与政策を放棄することを宣言した。こうした変化を反映してか、米中間の摩擦が増えている。2018 年 3 月には米台の政府高官の相互訪問を促進する台湾旅行法が成立した。また中国からの輸入品への追加関税や中国企業の米国内投資への制限などが発表され、米中間の貿易摩擦が高まりつつある。このような状況の中で、中国にとって、北朝鮮との関係改善は、米中間の競争においてカードとなりうるだろう。

中朝関係改善の意味

それでは中朝関係の改善は、北朝鮮の核問題においてどのような意味を持つだろうか。今後の見通しとして、予測しうるシナリオはいくつかあるが、最も蓋然性が高いのは、「古いゲームへの回帰」ではないだろうか。

北朝鮮の核放棄をめぐるプロセスでは、今後米朝交渉がどのように行われるかがカギとなる。しかし中国が北朝鮮の後ろ盾となりつつあるとすれば、北朝鮮の譲歩を引き出すのは容易でなくなるだろう。核放棄をめぐる交渉が二国間で行われるにせよ、多国間で行われるにせよ、そのプロセスは複雑な駆け引きの中で、緩慢な形でしか進まないだろう。他方で米国による対北朝鮮武力行使というシナリオは、中国が黙認しない限り実行はほとんど不可能であり、そして現在中国が北朝鮮へのコミットメントを示しつつある中では難しいと考えられる。

結局のところ、この状況は六者協議などで我々がこれまで見てきたものとよく似た構図と言ってよい。その意味でこれは古いゲームの再現である。しかしもちろん、まったく同じなのではない。確実に変化しているのは、北朝鮮の核・ミサイル開発が着実に大きく前進したという事実である。とはいえ、それでもほかの可能性、例えば米国が

成果を焦って米韓同盟の弱体化につながるような不必要な譲歩を行うといったシナリオに比べれば、「古いゲームへの回帰」は実現可能な中では、最もましなシナリオなのかもしれない。

（2018 年 5 月 17 日）

プロフィール profile

地域研究部
アジア・アフリカ研究室
主任研究官　　山口　信治

専門分野：中国政治・安全保障、中国の党軍関係、中国現代史

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課
直　通：03-3260-3011
代　表：03-3268-3111（内線 29171）
ＦＡＸ　：03-3260-3034
※ 防衛研究所ウェブサイト：http://www.nids.mod.go.jp/